

信仰の場を訪れて

——スルヤラヤ教団におけるマナーキブの記録——

阪 口 諒 祐*

私は、現代インドネシアのイスラームにおける「穏健」概念に関心を寄せている。これは、イスラーム過激派による非人道的なテロ事件などを背景に打ち出された、平和で寛容なイスラームの在り方であり、近年活発に議論されている。私はこのテーマを、国家や宗教エリートから発せられた政策や言説だけでなく、草の根のムスリムに着目する民衆の視点から「穏健」概念の諸相を探っている。その際、イスラーム神秘主義（スーフィズム）と、その実践共同体であるタリーカ（スーフィー教団）を分析の中心に据え、彼らの宗教実践を通じて「穏健」がいかに現場で体现され、再解釈されるのかを明らかにしようとしている。

本稿では、私が調査対象としているカーディリー・ナクシュバンディー・ポンドック・ブサントレン・スルヤラヤ教団（以下スルヤラヤ教団）で行なわれるマナーキブ（*Manaqib*）と呼ばれる儀式の様子を紹介する。マナーキブは本来、カーディリー教団の祖であるアブドゥル・カーディル・ギーラーニーの伝記を読誦することを目的とするもので聖者への称賛と接近を目的としている。これはスーフィズムの思想におけるファナー

（自己滅却）の一端ともいえ、スーフィー修行の一環として捉えられている [Hakim 2020]。

マナーキブは通常、イスラーム暦の毎月 11 日にスルヤラヤ教団の本部のモスクで行なわれ、毎度数千人の信徒が訪れる。今回は、スルヤラヤ教団のジャカルタ支部長を務めるキヤイ・ワヒューディン氏からのご厚意による招待があり、初めて実現したもので、自力ではたどり着くのが難しい山間のこの地に足を運べたこと自体、大変光栄なことだった。本部のスルヤラヤ教団は西ジャワ州に位置し、首都ジャカルタからは 5 時間ほどかかるため、現地に前乗りする形で同行させてもらった。宿泊地にはすでに多くの信徒が宿泊しており、中には国外から訪れている人もいた。

儀式の様子

儀式の朝は、想像以上に早かった。夜明け前からすでに多くの信徒たちが集まり、礼拝を済ませた人々が静かに開会を待っていた。私たちがモスクに到着した頃には、礼拝堂の中は人でぎゅうぎゅうに埋め尽くされており、もはや通路らしい通路も見えないほど

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 モスクの様子

だった（写真1）。人々は床に座り，中央の講壇を囲むように身を寄せ合い，合図を待っていた。

儀式は，まずクルアーンの読誦から始まる。続いて，スルヤラヤ教団の創設者であるアバ・スプ（Abah Sepuh）が編纂した教訓集『タンビーフ』（*Tanbih*）の朗誦が行なわれる。タンビーフには，信仰と倫理，師弟関係や国家への忠誠に至るまで，教団の信条を形づくる多くの指針が記されており，スルヤラヤの信徒たちにとって毎回のマナーキブでこのテキストに立ち返ることは，宗教的な誓いを新たに重要な行為である。

タンビーフの朗誦が終わると，いよいよこの儀式の核心部分であるマナーキブの朗読に移る。朗読されるのは，スーフィーの偉大な

聖者であり，TQN（タリーカ・カーディリーヤ＝ナクシュバンディーヤ）の源流をなすシャイフ・アブドゥル・カーディル・ジーラーニー（Abdul Qadir al-Jilani）の伝記である。このテキストには，彼の高德な生涯や数々のカラーマ（霊的奇跡）が語られており，朗読係が抑揚をつけながらゆっくりと読み上げる声に，参加者は深く耳を傾けていた。マナーキブの朗読が終わると，教団の高位指導者による説教が行なわれた。この講話は月ごとに担当が異なるというが，この日は長年教団に仕える教師が登壇し，信仰の堅持，師弟の絆，そして現代社会におけるスーフィーの役割について語った。その内容は決して抽象的な神秘思想にとどまらず，日常の中で信仰をどう実践していくかという，地に足のついた話も行なうそうである。最後に，全員で預言者ムハンマドに祝祷（サラワット）を唱え，閉会の辞が述べられ，儀式は正式に締めくくられる。

ワヒューディン氏はモスクに到着すると，迷うことなく奥へと進み，儀式に参加していった。信者としての務めを果たすその背中を見送りながら，私はひとり，モスクの内外を歩いてみることにした。すでにモスクの中は，座る場所を確保するのも難しいほどの人々で埋め尽くされていた。中に入りきれなかった参加者たちは，建物の外や廊下，日陰になる壁際などに腰を下ろし，それぞれが手にしたスマートフォンで，儀式の様子をYouTubeのライブ配信を通じて視聴していた。モスクの周囲には，教団に関連するいくつかのプサントレン（イスラーム寄宿学校）



写真 2 モスク外の市場が賑わっている様子

が点在しており、子どもたちもまた自分たちの場所で儀式に参加していた。中には、ラジオや配信音声を聴きながら、一緒にズィクル¹⁾やタンビーフの読誦を行なっている姿も見られた。彼らの無垢な声が時おり風に乗って聞こえてきた。また、全国各地から集まる大規模な集会ということもあり、モスクの外には所狭しと屋台や露店が並び、まるでお祭りのような賑わいを見せていた（写真 2）。香辛料の効いた焼き物の匂いや、揚げ菓子を売る掛け声が飛び交い、ある店ではアバ・スプの肖像画が描かれた額縁が売られ、またある店ではスルヤラヤ教団が独自に発行した教典や小冊子が並べられていた。こうして歩きながら私は、宗教儀式という限られた場面だ

けではなく、それを取り巻く人々の振る舞いや空間そのものから、スルヤラヤ教団の宗教実践がいかに生活に根づいたものであるかを、肌で感じていた。

儀式が終わって

儀式が終わり、会場の熱気も少し落ち着いてきた頃、私は改めてゆっくりとモスクの内部を見て回ることができた。昼どきの時間帯で、信者たちはモスクの片隅や屋外の本陰などに腰を下ろし、モスクのスタッフによって用意された炊き出しの食事を囲んでいた。私たちもその食事をいただくことになり、皿に盛られた温かいごはんとおかずを手に、静かに腰を下ろす。食事の場には、ジャカルタをはじめ各地の支部から集まった指導者たちもいて、いくつかの会話を交わす機会に恵まれた。

食事を終えると、案内してくれたワヒューディン氏が「せっかくだから」と声をかけてくれ、モスクの最上部にある墓所へと連れて行ってくれた。モスクの横にある緩やかな階段を登っていくと、スルヤラヤ教団におけるこの場所の象徴的な意味合いを感じさせる「Puncak Suryalaya（スルヤラヤの頂点）」と書かれた看板が見えてきた。墓所には、教団の創始者であるアバ・スプとその親族が眠っており、儀式を終えた多くの信者たちが列をなして順番に参詣に訪れていた。墓前では、集団でクルアーンの読誦をし、ズィクルを行っていた。私もまた、その場の空気に導か

1) アッラーの名を含む唱句を繰り返し唱える修行のこと。



写真3 墓所の様子

れるように墓前に立ち、しばらくのあいだ何も言葉を発さず、ただ黙って立ち尽くした。スルヤラヤという空間の中心に立つこの墓所は、単なる遺体の眠る場所ではなく、教団の霊的な起点として人々の心のよりどころとなっていることを、肌で感じる時間だった(写真3)。

再び、モスクの下に降りてくると、ワヒューディン氏から「どうでしたか、今日のマナーキブは」と尋ねられた。私がまだ言葉を探していると、彼は続けて「ここで信徒が集まることによって、教団の幅広い連帯を示しているんです」とつぶやいた。私は帰路の途中、この一日を静かに振り返っていた。マナーキブを通して私が見たのは壮大な儀礼でも綿密に構築された神秘体系でもなかった。

そこにあったのは、ごく日常にある祈りと、その場に身を置く人々のまなざしだった。

穏健の在りか

今回のマナーキブ体験が、私の研究テーマであるイスラームにおける「穏健」概念と直接的に結びついていただけではない。国家政策として提示される「穏健イスラーム」や、それに付随する宗教的規範、公共言説とは一線を画し、儀式の場で交わされた言葉や行為のひとつひとつは、いずれも個人の信仰と日常生活の中に静かに溶け込んでいるように思えた。

けれども、そうした一見「周縁的」に見える営みにこそ、民衆が体现する「穏健さ」の本質が宿っているのではないかと考えるようになった。そこには、「穏健」とか「中道」といった言葉で定義される以前の、より深く、より具体的な態度のようなものがあった。「穏健さ」というものは、理念として外から定義されるものではなく、むしろ人々のまなざしや振る舞い、集う場の空気の中に、すでに息づいているのではないだろうか。言い換えれば、それはひとつの「在り方」として、身体的に実践されているのだ。特別な教義や高度な言説を必要とせずとも、ある空間に身を置くことで自然と表れる信仰の態度。それが、儀式の場に満ちていた「穏健さ」の感触だった。この日私が見たもの、聞いたもの、感じたものは、直接的なデータとしては研究成果にならないかもしれない。しかし、それは私にとって、「穏健とは何か」という問いをもう一度立ち上げ直すための、大切な

手がかりになったように思う。そこには、制度や政策の枠を越えて、信仰が生きている現場の「呼吸」があった。

引用文献

Hakim, Budi Rahman. 2020. *Actualization of Neo-Sufism: A Case Study of the Tariqa Qadiriyya Naqshabandiyya Pondok Pesantren Suryalaya*. Ph. D. thesis, Tilburg University, Netherlands.

シロアリ採りの季節

——ザンビア北東部マンブウェ農村における雨季の暮らし——

笠原 望*

マンブウェの暮らす土地

「ムバラ？なんでそんな遠いところにいるんだ！」私がザンビアの首都ルサカで人びとに調査地の話をすると、たいていこのような言葉が返ってくる。しかし、私が「マンブウェの村で調査している」と答えると、ほとんどの人は納得する。

私の調査地はザンビア北部州北東部のムバラ県にあり、マンブウェの人びとが多く住んでいる地域である。隣国タンザニアとの国境までわずか 20 km に位置し、首都のルサカから 1,000 km 以上も離れ、長距離バスを乗り継ぎ、片道の移動だけでも最低 2 日以上もかかる。この遠隔地に、調査対象であるマンブウェの人びとは暮らしている。マンブウェは北部州のなかでも北東部を中心に居住し、農業を主な生業とする民族である。その人口は 15 万人ほどである。首都のルサカや

北部州の州都でマンブウェ語を話すと、「ムバラから来たのか？」と聞かれることもあり、ムバラはマンブウェの住む土地として認識されている。

2023 年 11 月、乾季から雨季へ移り変わり、これから農繁期で人びとが忙しくなる。そんな時期に私は初めてマンブウェの人びとが暮らす農村に入り、ある家族にお世話になることとなった。滞在先の家がある村には、チレンガ (*cilenga*) と呼ばれる直径が 7 m から 10 m ほどの草木が生い茂る小さな丘が点在している (写真 1)。

この小さな丘 (チレンガ) はシロアリ塚である。シロアリ (*inswa*) は、時間をかけて塚の裾野を広げ、その形を半球状にしている。マンブウェの農村においては、このチレンガが畑のなかにある場合にはそのまま耕起したり、草木を残して放置する場合もある。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科